

コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

発達支持的生徒指導で授業が変わる

今まで取り組んでいた学習指導も生徒指導であることを「意識する」、授業の中に生徒指導の視点を意識した取組を「意図的に組み込む」ことによって何が変わるのでしょう。魅力ある学校づくりに先行して取り組んでいる学校の校長先生方とお会いすると、ほぼ全ての校長先生から同じお話をお聞きします。それは、「授業中に教師が子どもを注意する大きな声がしなくなった」というものです。

授業の中での生徒指導、特に内在化した生徒指導に取り組むことで最も変化するのは実は教師なのです。特に教師の言動や姿勢が次のように変わります。

<子どもを見るまなざしが変わる>

「この場面では、あの子が活躍できそうだ」「あの子は発表はできていないけど、いつも頑張っているなあ」等、多様な子どもの姿を見つけようとする

<子どもへの声かけが変わる>

「拍手が自然にできていてとても素敵です」「間違いがあったからこそ、みんなで考えることができたね」等、子どもの姿を認める発言が増える

<子どもと向き合う際のふるまいが変わる>

「授業中に全員が応答できる質問を必ず一問は入れる」「話し合いの後で、発言できた子だけでなく、進行役の子もねぎらう」等、子ども真ん中の取組を行う

『提要』では、発達支持的生徒指導では「日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び、授業や行事等を通じた個と集団への働きかけが大切」とされています（『提要』p.20）が、学校生活の中心である日々の授業を通じた教師の温かいまなざし、声かけ、ふるまいの積み重ねこそが「発達支持的生徒指導」そのものであり、その結果として子ども達が「授業は分かりやすい」「みんなと何かをするのは楽しい」「主体的に取り組んでいる」と感じられる授業に変化することで、「学校は楽しい」という魅力につながるのではないのでしょうか。

「4つの視点」のうちの3つは、以前から「生徒指導の三機能」と言われていたものです。教師の若返り化等を踏まえ、自然と生まれる機能ではなく、意識し、意図的に組み込むために、明確に「視点」として持つことが求められているのです（高橋）。

人権教育・生徒指導課のホームページもご覧ください。
<https://www.pref.okayama.jp/soshiki/350/>



Vol.8

発行日 令和7年8月

岡山県教育庁 人権教育・生徒指導課

生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

授業の中での 生徒指導③

これまで2号にわたって、授業の中での生徒指導の考え方をお話ししてきました。今号は、少し具体的な実践事例を紹介しながら、「生徒指導の実践上の4つの視点」を踏まえた実践について、ポイントをまとめてみたいと思います。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒770-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

Q.「実践上の4つの視点」を踏まえた取組について、もう少し具体的に教えてください。

A. 前号で「グループ活動（話し合い）」を教科指導と生徒指導の双方の視点から考えることができることをご紹介しました（図1参照）。

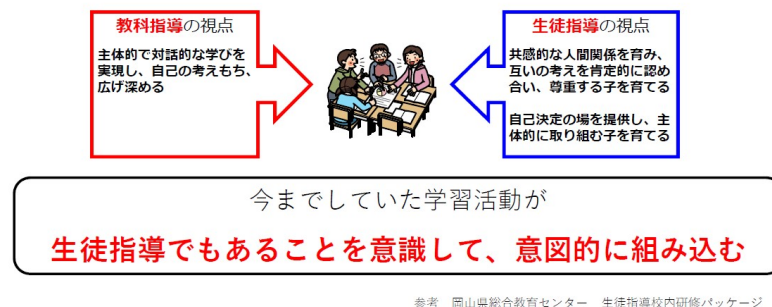
図では「生徒指導の視点」の例として二つの視点（「共感的人間関係」「自己決定」）を併記しています。二つの視点は両立する場合もあれば、どちらかに絞って取り組むこともあると思います。「こうなって欲しい」という教師の願いが反映した場合は、自然に絞り込まれ、意図的に組み込んだ取組になるのです。

授業の中での生徒指導

✕ 新たな実践・特別な手立て

日々の授業や学級経営で「当たり前」にしている工夫・配慮

（例）自分の立場を明らかにして話し合う場面



参考 岡山県総合教育センター 生徒指導校内研修パッケージ

図1 特別なことではない「生徒指導を意識した授業」

視点を意識すれば、教師の働きかけが変わる

一人一台端末を活用した取組で考えてみます。端末から各自の考えを付箋に書き込み、分類したりまとめたりする場面では、できるだけ多様な意見が書き込めるように工夫した取組が行われます。しかし、児童生徒が頑張ってたくさんの付箋を貼れば貼るほど、「集団に個が埋没」してしまう可能性が出てきます（図2左）。教科指導の視点であれば、これで良いのかもしれませんが、ここで生徒指導の視点「自己存在の感受への配慮」を持つ

意図的に組み込むには、児童生徒理解が重要

小さな変化かもしれないが…

先生は個が埋没しないように、どう取り組ませるでしょう？きっと、「付箋の色を自分の好きな色に変えてください」という指示が一言加わるのではないのでしょうか？（図2右）。一方で教師が左のままで生徒指導の視点を持っていないと、中央下のピンクの付箋を1枚だけ書けた児童生徒の答えを取り上げることができない可能性は大きく、自己存在感を消してしまったり、少数意見を尊重しないままになり、「共感的人間関係を育む」チャンスを逃してしまったりするかもしれません（上記以外にも、多くの視点を見つけられます）。



図2 視点を意識した端末活用の例

『子ども真ん中』の取組にするために

端末を使って調べ学習を行い、プレゼン資料をつかって発表するという学習活動を考えてみます。「自己決定」を尊重するのであれば、一人一人が課題を持ち、最後まで作業して発表するという方法になるでしょう。一方で、「共感的人間関係」を育みたいという意図を込めれば、途中で中間発表を行い、友達の意見を取り入れるという手順が加わります。さらに、「自己存在感」に着目すれば、班で共通テーマを設定し、役割分担や互いに調整する課程を経て、自分の責任を果たすという取組になるはずです。

視点を意識すれば、教師の言動や姿勢が今以上に「子ども真ん中」になります。これが「発達支持的生徒指導」なのです。

POINT

「生徒指導の実践上の4つの視点」を意識した授業を行う

→ 教師の言動や姿勢が子ども真ん中に変わる = 発達支持的生徒指導



『提要』のダウンロードはコチラ

視点を意識することで変わるもの